

黎明期の万葉集翻訳

小倉 久美子

はじめに

第5回万葉文化館主宰共同研究「海外における記紀万葉の受容に関する比較研究—翻訳にあらわれる日本文学の特徴について—」において、各言語の翻訳事例を比較検討するなかで、万葉歌を翻訳した初期の事例についてまとめる必要性を感じたため、これを担当した。

『万葉集』がはじめて海外へ渡海し、その翻訳が試みられたのは19世紀のことである。万葉歌の翻訳は20世紀に入ると、1906年にディキンズが、1919年にウェーリが英訳し、そして1929年からはピアソンによる英語全訳の刊行が開始するように、英語圏での翻訳が盛んになってくる。そのため本稿では19世紀を万葉集翻訳の黎明期と位置付けて、その過程をみていく。

ただし『万葉集』を翻訳した書物の書誌情報については、すでに佐佐木信綱『萬葉集事典』（平凡社、1956年初版）が「翻譯」の項目（771～776頁）にまとめている。これを上回る成果を出すことは難しいが、現在からみれば古くなった情報も見られるため、改めて『萬葉集事典』を読み直し、追加される情報を中心に報告したい⁽¹⁾。

1. 万葉集翻訳の初見 —クラブロートの事例—

いつ、どの書物が万葉歌を翻訳した初見のものにあたるのか。“*The Manyōshū : the Nippon Gakujutsu Shinkōkai translation of one thousand poems*” (New York : Columbia University Press, 1969) の序文でドナルド・キーン氏はつぎのように述べる（日本語訳を私に併記する）。

The first translations from the *Manyōshū* into a European language date back more than a century, well before Japan was opened to the West. One “envoy” (*hanka*) to a long poem was translated as early as 1834 by the celebrated German orientalist Heinrich Julius Klaproth (1783-1835). Klaproth, having journeyed to Siberia in pursuit of strange languages, encountered some illiterate Japanese castaways, fisherman, hardly ideal mentors for the study of eighth-century poetry. Not surprisingly, his translation was anything but accurate.

『万葉集』が初めて西洋の言葉に翻訳されたのは1世紀以上も前、日本が欧米諸国に向けて開国するよりずっと前のことです。ある長歌にひつついた“envoy”（反歌）が翻訳されたのは、1834年という早い時期、有名なドイツの東洋学者ハインリヒ・ユリウス・クラブロート（1783-1835）によるものです。彼は馴染みのない言語を研究するためにシベリアを旅行し、そこで8世紀の詩歌を学ぶに理想的な先生とはかけ離れた、読み書きのできない日本人の漂流者や漁師と出会いました。当然のことながら、彼の翻訳は正確とはいえないものになりました。

1834年にクラブロートによって訳された万葉歌については、『萬葉集事典』の「佛譯日本王代一覽」の項でも「この佛譯は、萬葉集の歌の欧州に於ける最初の翻譯なり」と指摘されている⁽²⁾。

クラブロートは、ドイツ人でありながら後半生のほとんどをパリで過ごし、フランス東洋学の発展に深く貢献した人物であるらしい。その著作『佛譯日本王代一覽』(1834年パリにて刊行。原題は“*Nippon o dai itsi ran, ou Annales des empereurs du Japon*”)は、林鶯峯『日本王代一覽』(1652年成立)をイサーク・ティチング(Isaac Titsingh, 1745-1812)が訳し、それを校訂増補したものである。増補のさい独自に脚注を加えており、その注部分に『万葉集』巻18の4097番歌がつぎのようにみられる⁽³⁾。

So e me ro ghi
Ni mi o sa ki yen to
A zou ma na ro
Moutsi-no kou yama ni
Ka ga ne fana sako.

C'est-à-dire : Le règne du Daïri est si agréable aux dieux , qu'ils font éclore des fleurs d'or sur les montagnes de Mouts.

4097番歌は「陸奥国より金を出だせる詔書を賀す歌一首」の反歌のひとつであり、『佛譯日本王代一覽』では聖武天皇の事跡を紹介するなかで補注されている。ただ現在は「天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に黄金花咲く(須賣呂伎能 御代佐可延牟等 阿頭麻奈流 美知^(能)乃久夜麻尔 金花佐久)」とよまれるのに対し、クラブロートのローマ字表記には違和感がある。これについて『萬葉集事典』は「羅馬字にうかがはるる發音などは誤もあれど」と評している。

しかし一概に誤りと断定するのはためられる。というのも、この時期はローマ字表記の過渡期にあたり、その体系的な用法がいまだ確立していない。そしてドナルド・キーン氏が紹介するエピソードにあるように、クラブロートは漂流者たちから日本語を学んだらしい。ならばクラブロートは自身が聞き取った万葉歌の発音をそのまま表記した可能性もあるのではないか。現在からみれば誤ったローマ字表記になるが、クラブロートにとってはこれが最善であり、黎明期ゆえのことと評価できよう。

ところで、先に触れたティチングも『万葉集』の存在は知っていたようである。というのも、その著書『幕府治下見聞奇聞録』(1820年パリにて刊行。原題は“*Mémoires et Anecdotes sur la Dynastie régnante des Djogouns, Souverains du Japon*”)において『万葉集』がつぎのように見られるためである。

Les deux ouvrages en poésie les plus recherchés sont le *Ko-kin-djou*, ou collection de poèmes anciens et modernes, par *Kinotsoura-inki*; et le *Manyo-zou*, collection d'anciens poèmes, depuis le temps du dixième *Dairi*, *Suisin-ten-o*, jusqu'au soixantième, *Daigo-ten-o*, par *Fatsibanna-no-moroye*.

このように、最も好まれた歌集として『古今集』(*Ko-kin-djou*)と『万葉集』(*Manyo-zou*)とが紹介されている。『万葉集』については、第10代崇神天皇(*Suisin-ten-o*)から第60代醍醐天皇(*Daigo-ten-o*)までの古い詩歌が橘諸兄(*Fatsibanna-no-moroye*)によって収集された⁽⁴⁾という説明がなされている。『萬葉集事典』に「萬葉集そのものの説明、人名、書名には、發音上その他の誤もあれど、萬葉集の名の見ゆる資料としては、歐洲に於いて最も古きものなるべし」とあるように、その説明内容には誤解がみられるものの、『万葉集』の書名が海外で紹介された初めての事例と位置付けられる。

『万葉集』の書物そのものが初めて海外へ渡海したのは、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796-1866) による。シーボルトは第一次日本滞在時 (1823-1829) に北村季吟『万葉拾穂抄』(貞享5年版、30冊) を入手し、いわゆるシーボルト事件を経てこれをオランダへ持ち帰った。現在もオランダのライデン大学図書館に所蔵されていることが確認できる⁽⁵⁾。

以上のように、クラブロートが4097番歌をフランス語訳する以前、ティチングが『万葉集』を紹介し、シーボルトが『万葉拾穂抄』を国外へもたらした。19世紀に入って『万葉集』の存在が徐々に知られるようになっていったのである。ただしクラブロートが何によって4097番歌を知り得たのかについては定かではない。新村出氏はロンドン滞在中、クラブロートの翻訳についてつぎのように述べている⁽⁶⁾。

チチングの渡来は、安永年間であります、彼自身は、萬葉を將來したことはなかつたやうであります。安永より數十年後に來たシーボルト時代のクラブロードは、其以前イルクーツクよりキャフタ邊まで來たことはありますが、日本には來なかつた獨逸の東洋學者であります、彼がこゝに萬葉を引いたのは、何によつたか、原本よりか、又は孫引かその邊はわかりません。原本よりとすると、前にかゝげたシーボルト將來書目に見ゆる本によつたかとも思ひますが確かではありません。念の爲めクラブロードの藏書目録(一八三九年巴里刊)を見ましたがありません。

クラブロートはロシアのイルクーツクからモンゴル国境手前のキャフタまで訪れた経験があるものの、鎖国中の日本へは来る機会がなかったらしい。そのため自らが『万葉集』を入手することは難しく、ティチングも『万葉集』を持って帰国しなかったことから、シーボルトが舶載した『万葉拾穂抄』を見たのかもしれない、とする。クラブロートがどのような『万葉集』を底本として万葉歌を翻訳したのか、あるいは4097番歌を暗唱する人物と出会い聞き知った可能性も考えられよう。

2. 万葉集翻訳の夜明け

ここで『萬葉集事典』掲載の翻訳書について整理しておきたい。後掲の一覧表は『萬葉集事典』にみられる19世紀の翻訳書を刊行年の古い順番に並べたものである。このように、クラブロートによって1首の万葉歌がフランス語訳されてから37年後、レオン・ルイ・リュシアン・プリュノル・ド・ロニー (Léon Louis Lucien Prunol de Rosny, 1837-1914) によるフランス語訳がみられる。周知のように当時の公用語はフランス語であるため、これらの書物を通じて『万葉集』の存在が広く知られるようになったことであろう。

ただ19世紀はフランスよりもドイツのほうが日本に関する研究が比較的進んでおり、ロニーの著書『詩歌撰葉』が刊行された翌年に、アウグスト・プフィッツマイアー (August Pfizmaier, 1808-1887) によって200首以上もの長短歌がドイツ語訳されたのも、ドイツ国内での日本語研究の進展と切り離して理解することができない。

プフィッツマイアーはこの万葉歌翻訳に先立つ1849年、記紀の神代巻にみられる歌謡も訳している。それは“*Beiträge zur Kenntnis der ältesten japanischen Poesie*”と題し、ウィーンの帝国学士院が発行する報告書に掲載された(詳細は後述する)。クリス・バルアド氏は「これ(注一ロニー『詩歌撰葉』刊行のこと)より19年前に、ウィーン大学のフィッツマイヤーは『万葉集』の一部を訳しているが、『詩歌選葉^(ママ)』はフランス語では初の試みである」⁽⁷⁾と述べるが、1851年に刊行されたのは“*Untersuchungen*

『萬葉集事典』にみえる 19 世紀の翻訳書

書 名	著 者	言 語	刊行年	事典の頁
佛譯日本王代一覽	クラプロート	フランス語	1834 年	775 上
詩歌撰葉	レオン・ド・ローニ	フランス語	1871 年	771 上
萬葉集歌鈔	プフィッツマイエル	ドイツ語	1872 年	771 下
日本古代の詩歌	バジル・ホール ・チェンバレン	英語	1880 年	771 下
和歌集	フロレンツ	ドイツ語	1894 年	772 上

〔凡例〕

- ・本表は佐佐木信綱『萬葉集事典』が立項する 19 世紀出版の翻訳書を刊行年の古い順番に並べたものである。
- ・書名と人名の日本語表記はすべて『萬葉集事典』に拠った。
- ・「事典の頁」の項目は『萬葉集事典』のページ番号を示し、「上」はページの上段を、「下」は下段をいう。

über den Bau der Aino-Sprache” というアイヌ語に関する研究であり、管見の限りで万葉歌の翻訳はみられなかった⁽⁸⁾。

ちなみに、記紀万葉以外の韻文翻訳についてもみると、たとえば 1866 年にフレデリック・ヴィクター・ディキンズ (Frederick Victor Dickins, 1838-1915) による百人一首の英語全訳 “Hyakunin Isshu” が、1885 年にはジュディット・ゴーチエ (Judith Gautier, 1850-1917) による八代集のフランス語抄訳 “Poèmes de la libellule” が刊行されている⁽⁹⁾。このように 19 世紀のヨーロッパでは、『万葉集』のみならず日本の和歌全般に関心が持たれつつあった傾向がうかがえる⁽¹⁰⁾。

以上、前掲の一覧表からわかるように、ロニーやプフィッツマイアーは万葉集翻訳の先駆けといえる。彼らはなぜ、いかにして万葉集翻訳に取り組んだのか。再び『萬葉集事典』の検討を踏まえながら具体的にみていきたい。

3. レオン・ド・ロニー『詩歌撰葉』について

フランスにおける日本語・日本文化研究の草分け的存在にあたるロニーについては、すでに日本でも研究が進められている⁽¹¹⁾。ひとまず、それらに学びながらロニーの主な業績をまとめる。

- 1837 年 フランス北部の都市リールにて生誕。父親は考古学者。
- 1852 年 パリの東洋語専門学校に入学。中国研究者に師事しながら独学で日本語を追究する。
- 1854 年 フランス初の日本語教科書 “Résumé des principales connaissances nécessaires pour l'étude de la langue japonaise” を刊行。
- 1856 年 日本語研究入門書 “Introduction à l'étude de la langue japonaise” を刊行。
- 1862 年 遣欧使節団の通訳を務め、福沢諭吉と親交を結ぶ。
- 1863 年 日本語読解手引書 “Exercices de Lecture japonaise” などを刊行。
- 1868 年 東洋語専門学校に日本語学科が新設され、初代教授となる。

1869年 翻訳手引書“*Thèmes faciles et gradués pour l’ Étude de la Langue japonaise*”を刊行。
1871年 『詩歌撰葉』を刊行。
1873年 国際東洋学者学会を発足。
1883年 『古事記』の一部を翻訳した“*Mémorial de l’ Antiquité japonaise : Fragments relais à la Théogénie du Nippon*”を発表。
1886年 高等研究実習院で宗教講座を担当する。
1887年 『日本書紀』神代巻を翻訳した“*Le Livre canonique de l’ Antiquité japonaise : Histoire des Dynasties divines*”を発表。
1907年 東洋語専門学校にて定年をむかえる。
1914年 死去。

ロニーは父親の影響で若い頃から日本に興味をもっていたようである。当時のフランスは日本に関する情報が少なく独学で日本語を学んだ。その知識が評価されて遣欧使節団の通訳を拝命するが、生涯にわたって来日経験のないロニーにとって、この仕事は大きな意味を持ったことであろう。またこの経験は日本語教育にも生かされ、ロニーは数多くのテキストを執筆している。晩年に日本語研究を離れて神話学研究へ傾倒していくことを踏まえるならば、『詩歌撰葉』は彼が日本語研究者・教育者としてもっとも成熟していた時期に書かれた著作と評価できるように思う。

一方『萬葉集事典』では『詩歌撰葉』についてつぎのように解説される。

詩歌撰葉

一冊 刊 レオン・ド・ローニ

〔体裁〕 假洋装。菊判。〔標題〕 Anthologie japonaise, Poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon 〔内容〕 フランスに於ける有名なる東洋學者、土俗學者にして、文久二年（西紀一八六二）幕府の使節が巴里に赴きし際、その通譯をつとめしことあるローニが、日本古今の各種の詩歌を集め、原文に羅馬字及び佛譯を附して刊行せるもの。序、諸言、序論、本文、索引、目録、漢字及び假名書の詩歌等より成る。本文の最初に、萬葉集の長短歌十首あり。萬葉集の略解説をも附す。西紀一八七一年のラブレの序及び一八六九年の著者の緒言あり。〔備考〕 西曆一八七一年、巴里にて刊行。大和国史館萬葉室所藏。

これについて『詩歌撰葉』の写真が掲載されている。写真は和歌山県立万葉室の所蔵のものであるらしい。万葉室とは1940年に橿原道場内の大和国史館に開室された県立施設である。そこでは佐佐木信綱氏の指導により『万葉集』関連の資料が収集された。大和国史館は戦後に大和歴史館と改称し、やがて橿原考古学研究所附属博物館となり現在に至っている。ただし大和国史館の所蔵資料は、同じく橿原道場内にあった橿原文庫が1960年に県立橿原図書館として独立・改称したのを機にすべて移管された。橿原図書館内には万葉文庫が設けられ、佐佐木信綱氏の門下生が中心となって内外で活発な啓蒙活動がなされた。2001年、県立万葉文化館の開館に伴って橿原図書館は閉鎖となり、万葉文庫の資料は当館の万葉図書・情報室へと引き継がれた。万葉図書・情報室は現在約16,000冊の蔵書を有するが、うち2,500冊がそれにあたる⁽¹²⁾。

いま万葉文化館万葉図書・情報室に所蔵される『詩歌撰葉』⁽¹³⁾を実見してみると、『萬葉集事典』の解説文といくつか異なる部分がある。顕著な違いはその体裁であり、かつて假洋装とされていたそれは橿原図書館への移管に際して製本された。フランス国立図書館所蔵の『詩歌撰葉』⁽¹³⁾と比較してみると、

小口が数センチ切断されていることがわかり、製本の影響と考えられる。また『萬葉集事典』掲載のページだけがひどく焼けて変色しており、おそらく万葉文庫内で展示していたのが原因と思われる。こうした改変は認められるものの、本書の価値が損なわれるほどではない。

『詩歌撰葉』は、①エドゥアール・ド・ラブレー（Édouard René de Laboulaye, 1811-1883）による序文、②前書き、③序論、④本編 a 万葉集の解説と歌 9 首、b 百人一首の解説と歌 25 首、c 雑歌の解説と歌 17 首、d 葉歌の解説と詩 6 篇、e 日本詩撰の解説と詩 8 篇、f 大衆歌謡の解説と詩 3 篇、⑤索引、⑥文献目録、⑦原書の石版印刷、で構成される。本書の大きな特徴は末尾に付けられた優美な「詩歌撰葉」(⑦)にあると思う。ここからは鑑賞も視野に入れた工夫が感じ取れる⁽¹⁴⁾。

ともあれ、本書の意図はロニー自身が書いた文章(②③④)に明示されている。言及は多岐にわたるが、書誌に関わる情報としては以下の3点に注目できる⁽¹⁵⁾。

(1) 出版に至った動機

③序論の冒頭によると、フランス国内でいまだ日本の文学や歴史に関する書籍の情報が不足しているのが残念であり、もし注釈書の類があれば日本の文学作品に東洋学者の注目をひくことができる、とある。決して十分とはいえないが自分の集めた情報を紹介することで、多くの東洋学者に日本文学を知ってもらいたい、という考えから本書を出版するに至ったとする。

(2) 本書で配慮したこと

③序論の末尾によると、学生のために翻訳作品の原文をひらがなの活字体で、つづいてローマ字体で記し、聴講生のために逐語訳も加えた。翻訳はたいいてい多くの説明を必要とするが、可能な限り原歌に近い訳となるように努めた、とある。加えて、アジアの歴史や文学愛好者の関心を引くために、歴史的・文献学的な注もいくつか掲載した。そして東洋学者の役に立つよう索引も添えたとする。

(3) 万葉集の底本について

④a 万葉集解説によると、ロニーは本書執筆に際して、『万葉集』の版本は『万葉集略解』しか見ることができなかった、とある。彼が見たのは安政三年版の『万葉集略解』（全 20 巻）であり、これが底本になったと考えられる。

以上のように、『詩歌撰葉』はフランス国内の東洋学者や、ロニーが指導する学生たちも視野に入れた読者層を意識して出版されたことがわかる。底本は『万葉集略解』が使用され、ロニー自身はこれしか見ることができなかったため選択の余地はなかったようである。

ロニーが④本編で選んだ万葉歌は全 9 首で、その配列順に歌番号を並べるとつぎのとおり。

巻 20 の 4516 番歌	…9 ページ
巻 3 の 242 番歌	…11 ページ
巻 3 の 243 番歌	…11 ページ
巻 3 の 235 番歌	…13 ページ
巻 2 の 159 番歌	…15 ページ
巻 2 の 150 番歌	…19 ページ
巻 4 の 690 番歌	…22 ページ

巻4 の 699 番歌 …23 ページ

巻10 の 2332 番歌 …24 ページ

このほか、万葉集解説の脚注に巻3の238番歌・369番歌が、159番歌の解説文に巻3の416番歌と『懷風藻』大津皇子の漢詩とが訳されている。

9首の内訳は、雑歌の短歌が5首、挽歌の長歌が2首、相聞の短歌が2首で、それぞれフランス語によるタイトルが付けられている。タイトルは固有の地名や人名が省かれて平易な訳となっている。他と異なっているのは11ページで、242番歌「弓削皇子の吉野に遊しし時の御歌一首」と次の243番歌「春日王の和へ奉れる歌一首」とが“SOUHAITS DE BONHEUR”（幸せの願い）というタイトルで一括りにされている。『詩歌撰葉』編纂におけるロニーのスタンスがうかがわれよう。

以上、『詩歌撰葉』の書誌情報を整理してきたが、ロニー研究の進展も手伝って新たな知見を得られたように思う。つづいては『詩歌撰葉』の翌年に刊行されたプフィッツマイアーの『萬葉集歌鈔』についてみていきたい。

4. アウグスト・プフィッツマイアー『萬葉集歌鈔』について

プフィッツマイアーは、チェコのカールスバートにて生まれ、プラーク大学で医学博士号を取得した。その後はオーストラリアのウィーンにて医師として働くかわら、日本語などの国外言語の研究に勤しんだらしい⁽¹⁶⁾。クラブロートやロニーと同じく来日経験はない。彼の業績を代表するものとして、1847年に発表した柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』の完訳が挙げられる。ヨーロッパにあっていち早く日本の作品に注目し、その翻訳を試み広めたことから日本研究の開拓者と評されることもある。ただし現在、ロニーに比べるとその評価は低く感じる。

『萬葉集歌鈔』に関して『萬葉集事典』にはつぎのような解説および写真がみられる。写真は『詩歌撰葉』と同じく備考にみえる「狩野亨吉博士蔵」のものと考えられる。

萬葉集歌鈔 一冊 刊 プフィッツマイエル

〔體裁〕洋装。縦九寸八分、横七寸四分。〔標題〕Gedichte aus der Sammlung der Zehntausend Blätter 〔内容〕巻四の大部分、及び巻三の挽歌の部の殆ど全部、二百十六首を原文のままに掲げ、羅馬字にて讀方を示し、獨譯を附せるもの。初に萬葉集の解説あり。終に、旅人と家持との官歴を載す。（通行本の巻三の終にあるものの譯なり）〔備考〕西暦一八七二年（明治五年）刊行の、維納のアカデミー紀要第廿一卷よりの抜刷なり。狩野亨吉博士蔵。

狩野亨吉（1865-1942）の蔵書は、ほとんどが東北帝国大学に売却され、現在は東北大学附属図書館に狩野文庫として所蔵されている。また日記・書簡類は東京大学駒場図書館狩野文庫に、古文書類は京都大学総合博物館に、数学天文書・医学書類は九州大学附属図書館狩野文庫にも所蔵される。しかし、それらの所蔵機関の目録に当たったが『萬葉集歌鈔』に該当する資料を見出すことは出来なかった。

佐佐木氏による『萬葉集歌鈔』の紹介は、『和歌史の研究』に載る「外人の萬葉集翻訳」にもみることができる。しかも初版本（1915年刊）には、事典とは別のページの『萬葉集歌鈔』の写真が掲載されており、そのキャプションは「萬葉集歌鈔」ではなく「フ氏獨訳萬葉集」となっている。紹介文はつぎのとおり⁽¹⁷⁾（私に下線を付す）。

チチングのは、單に萬葉の名の出たのであるが、更に外人で萬葉集の翻譯を試みた最初の人は、維納の有名な東洋學者フイツマイヤー氏であらう。(中略)氏が萬葉集の翻譯は、卷四の大部分のみであるが、原文を掲げ、譯文と註とが添つて居て、その書式など、参考とするに足りる。こたび狩野亨吉博士から贈られたのでこゝに一葉を寫眞版として挿入しておく。此書は、萬葉集よりの詩といひ、西曆一八七二年、即ち明治五年維納で出版されたものである。

このとき佐佐木氏は『萬葉集歌鈔』を萬葉集翻譯の初見とし、クラブロートやロニーの訳本の存在をまだ知らなかったらしい(傍線部)。そして『萬葉集歌鈔』は狩野氏から贈与された(波線部)としてゐる。狩野氏から佐佐木氏へ贈られた『萬葉集歌鈔』は著書『上代文學史』(1936年刊)でも紹介され、「フイツマイヤー譯萬葉集(竹柏園所藏)」というキャプションがつけられている⁽¹⁸⁾。掲載された写真は『萬葉集事典』と同じページである。周知のように竹柏園の蔵書は佐佐木氏のコレクションで構成されている。『竹柏園蔵書志』(1939年刊)には「萬葉集歌鈔 獨譯 一冊刊 フイツマイヤー(中略) 狩野亨吉博士所贈」とあり⁽¹⁹⁾、当該書の内容を確認することができた。

竹柏園の萬葉集関連資料は石川武美氏が一括購入し、現在は石川武美記念図書館(旧お茶の水図書館)に収蔵されており、原本を実見する機会を得た⁽²⁰⁾。本誌の寸法は29.5cm×22.5cm、全92ページで落丁はなく、鉛筆で数箇所の書き込みがあった。見返しには「贈 狩野亨吉」(一行目)「佐々木信綱君」(二行目)という墨書きがみられた。製本の背表紙には「フヒツマイエル氏譯 萬葉集 竹柏園蔵書」と箔押しされていた。

ところで、先に引用した佐佐木氏論文「外人の萬葉集翻譯」には続きがある。それは「なほエンクステルンの大日本書史によると、フ氏は已に、嘉永年間に日本古代の歌に關する論文を著されてゐるといふ事であるが、其書は遺憾ながら我國に傳はり來りをれりや否やを知らない」というもので、記紀神代卷歌謡のドイツ語全訳とその特質を論じた「日本最古の詩歌に關する論文」⁽²¹⁾(1849年発表。原題は“Beiträge zur Kenntnis der ältesten japanischen Poesie”)に触れている。その論文は初版本(1915年刊)当時まだ日本で読むことができなかったようだが、増訂再版本(1927年刊)になるとつぎのような追記が加えられる⁽²²⁾。

追記一。プ氏が、西曆一八四九年即ち嘉永二年に著した「日本最古の詩歌に關する論文」は、維納の帝國學士院の報告に發表した三十五頁ほどのものであるが、從來我國に傳はつてゐなかつたと思はれる。然るに、その論文が米國紐育圖書館に所藏されてゐたのを同地在留の原良三郎氏が全部撮影して寄贈せられたので、初めて見ることを得た。最初に日本詩歌の音調形式等の特質を考察し、次に神話の一部分を譯しつつ、記紀の神代卷にある短歌長歌を全部獨譯してあるが、文中、萬葉集は價值の多いものであらうが、未だ見ることを得ないから、ここには述べないといつてゐる。心の花廿六卷七號、久松潜一氏論文參照。

原良三郎氏の協力により、ニューヨーク図書館所蔵の複写を手に入れている。参考に挙がっているのは、久松潜一氏の「フイツマイヤー氏の日本最古の詩歌に關する論文に就て」という論文のことである。ただし『心の花』26卷7号ではなく、25卷7号の誤りである。『心の花』25卷7号は1921年に發刊され、口絵には「日本最古の詩歌に關する論文」のコロタイプ版が使われている。

久松氏の論文によれば、佐佐木氏のもとに寄贈された複写は、「日本最古の詩歌に關する論文」が日

本に渡来した初めてのものであるため、自分が代わって紹介をするとし、その論文の概略をまとめている。上記の佐佐木氏による追記の内容は、久松氏の論文を踏襲したものである。指摘のように、プフィッツマイアーは「日本最古の詩歌に関する論文」を発表した1849年段階で、いまだ『万葉集』を見る機会を得ないことから、記紀歌謡によって日本最古の詩歌を考えた。そこから23年後、『萬葉集歌鈔』はどのようなきっかけで執筆に至ったのだろうか。

それを知る手がかりとなるのは、やはり『萬葉集歌鈔』の序文になろう。幸いなことに『心の花』25巻11号（1921年発刊）に日本語全訳が掲載されている⁽²³⁾。これによれば、『万葉集』は「初めウインになかったが同國の東亞探究の結果として、多くの他の非常に価値の多い書籍とともに帝國圖書館に得られた。そして故ミュンヒ、ベリングハウゼン男爵閣下の特別の好意によつて著者は尠くともその萬葉集の初めの數卷をなほそれらを整理する前に十分に閲覽をする事が出來た」とあり、ウィーンの帝國圖書館の蔵書を特別閲覽する機会に恵まれたことがつづられている⁽²⁴⁾。プフィッツマイアーにとって『万葉集』は「最古のかつ最大なる日本の言語記念碑」であり、それに取り組んだ『萬葉集歌鈔』は「最古の日本の言語、表現法かつ書體を知るため」に有益と自負している。自身の言語学研究的の深化を図ることが目的であったことがうかがえる。

プフィッツマイアーが翻訳に際して選んだ万葉歌には、つぎのような理由があった。

最初の三巻に含まれて居る詩は就中、其中に現れてくる言語の殆ど半ばは理解する事の出来ない様な部分である。しかし近頃得られた書籍、古言梯の助けによつて完全なる説明が殆ど可能である。この作品もいくらか慣れてくれば親みやすくなれるだらうとの豫想のもとに暫く陳腐な言語が稀になり初めた卷四から若干の詩を撰んだのである。

彼は帝國圖書館で初めのほうの数巻を閲覽したとあったが、巻1から巻3までの歌はほとんど理解できなかったようである。それでも古語辞書『古言梯』（1764年成立）などを駆使して、巻4から歌を撰んだとある。実際、『萬葉集歌鈔』には215首の万葉歌が翻訳されている⁽²⁵⁾。その配列順に歌番号を列記すると、巻4の485～542、552～565、568～575、581～585、587～610、613～620、623、624、626、631～641、643～646、651～652、668～671、690、711～713、709番歌、巻3の415～483番歌となり、434・626番歌は或云も訳している。選歌は巻3の挽歌と巻4の相聞に極めて偏っているのである。

それらの歌々には誤訳が散見され、佐佐木氏も「日本でもさへも難解の書を、ことに海外での譯であるから、時代の早いプフィッツマイエルなどは、「あぢむら」は鴨の群の義であるのを、「味村」といふ地名と思ひ誤つて譯などしてゐるが、それは無理もないことである」⁽²⁶⁾と述べている。新村氏もプフィッツマイアーよりロニーの訳を高く評価している⁽²⁷⁾。

ところで、プフィッツマイアーが帝國圖書館で特別閲覽したという『万葉集』は、どのような種類の本だったのだろうか。序文には底本に関する記述はみられないが、「三十一卷から成るこの作品たるや、著しき事には、言語上の點に於いて説明を非常にしばし必要とする詩の本文に唯一の註解もなくして、たゞこゝかしこに當該詩の成立せられた事情に就いて二三の言葉があるのみである」とあり、注釈の書入れが加えられていない本と推察される⁽²⁸⁾。「二三の言葉」は題詞や左注のことを指すと考えられる。

一方『萬葉集歌鈔』の本文をみると、題詞と万葉歌とが漢字で印字されおり⁽²⁹⁾、歌は片仮名の傍訓で版本と一致する。このことから底本は寛永版本（もしくは宝永版本）であったと考えられる。帝國圖書館でプフィッツマイアーが特別閲覽した『万葉集』の本が何種類あったか判然としないが、少なく

とも翻訳にあたって版本を目にしていた可能性が考えられよう。

以上、書誌学的見地からプフィッツマイアーの『萬葉集歌鈔』についてみてきた。大学紀要に発表された論文というだけあって、翻訳の目的が自身の学術的追究に重きを置いており、その点で東洋学者や学生たちを読者に想定したロニーとは異なる。訳された歌は巻3と巻4に偏っているものの、200首を超える歌数はその後の万葉集翻訳と比べてもひとときわ多い。現在からみれば歌の解釈に誤りが散見するが、これだけまとまった万葉歌の翻訳が試みられたという点では評価されるべきであろう。

おわりに

本稿では19世紀に海外で出版された万葉集翻訳書の書誌的情報についてまとめた。フロレンツやチェンバレンについてはすでに数多くの研究成果があるため扱っていない。またそれぞれの翻訳内容の適否についても力不足のため批判には至らなかった。

今回、改めて佐佐木氏による調査成果を読み直して、その精度の高さに驚かされた。もちろんそれは佐佐木氏の豊富な人脈によるもので、決して一人で成し遂げられるものではない。誤解を恐れずにいえば、『萬葉集事典』の「翻譯」の項目内容は共同の研究成果ともいえよう。佐佐木氏は論文の最後に「外人の萬葉研究といふ題目について、新しい研究をして、吾人を益してくれる學者があらばと望まれる」⁽³⁰⁾と期待を述べているが、『萬葉集事典』以降にどれだけ研究が進展しただろうか。その点で本稿は多少なりとも意味を成したように思う。本稿で報告した成果が、今後の万葉集翻訳研究の一助となれば幸いである。

註

- (1) 本稿では特に断らない限り翻訳書の日本語書名は『萬葉集事典』による。これは『萬葉集事典』との比較をより明瞭にするためである。原則初回に限っては原題を併記する。
- (2) 『萬葉集事典』775頁上段の「佛訳日本王代一覧」は筆者を「同上」とし、それは前頁下段の「チチング」を示しているが、クラブロートの誤りであろう。
- (3) 2015年1月22日（木）に国際日本文化研究センター図書館において『Nipon o dai itsi ran, ou Annales des empereurs du Japon』（請求記号DS/834/Ti）の原本調査および撮影をおこなった。
- (4) クラブロートの『佛訳日本王代一覧』でも『万葉集』編者を橘諸兄（Tatsi banano Moroye）とする。シーボルトが舶載して持ち帰った『万葉拾穂抄』（ライデン大学図書館蔵）に貼付された石版リストにも「387 萬葉集 橘諸兄公集 全三十冊」とある。
- (5) 人間文化研究機構 国文学研究資料館編『シーボルト日本書籍コレクション 現存書目録と研究』（勉誠出版、2014年）の140頁（目録番号437）による。また佐佐木信綱『国文学の文献学的研究』（岩波書店、1935年）第一編の附録「歐洲へ舶載された最初の萬葉集」には藤懸静也氏から提供されたライデン大学図書館蔵『万葉拾穂抄』の表紙の写真が掲載されている。この写真は『萬葉集事典』775頁下段でも紹介されている。
- (6) 新村出「萬葉集の歐譯について」（『心の花』25巻11号、1921年）3頁。これは1921年7月20日にロンドンで書かれたもので、冒頭に「數年前萬葉集の西渡、又は歐譯についてお尋ねを受けたことがあります、（中略）それがたしか和歌史の研究にも掲載されたこと、覚えてゐます。今度英國に再遊して、（中略）古いお約束を果しておかうといふ氣になり、一通りしらべて差出すことにしました。」とあり『和歌史の研究』が佐佐木信綱氏の著作であることから、佐佐木氏の求めによっ

- て調査した成果をまとめたものと推察される。また『萬葉集事典』775 頁下段の「新村博士の泰西に赴かれし際の通信」はこれにあたると思われる。
- (7) クリス・ベルアド「フランスにおける日本学の草分けレオン・ド・ロニーについて—ロニーの日本文化紹介をめぐって—」(石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編『日仏文学・美術の交流—「トロニコワ・コレクション」とその周辺—』大手前大学比較文化研究叢書 10、思文閣出版、2014 年) 72 頁。
- (8) 2016 年現在、wikipedia のアウグスト・プフィッツマイアーの項目では、「1851 年に『日本古代詩の研究』を出版。1872 年発表の「Beiträge zur Kenntnis der ältesten japanischen Poesie」は、万葉集の 200 首余りを訳出したものであり、ヨーロッパにおける万葉集研究の開拓的存在だといわれる」と解説されているがこれは誤り。1851 年に出版されたのはアイヌ語に関する研究書である。「Beiträge zur Kenntnis der ältesten japanischen Poesie」は 1849 年に発表された記紀歌謡の全訳であり万葉歌は翻訳されていない。
- (9) ゴーチエについては、吉川順子『詩のジャポニスム ジュディット・ゴーチエの自然と人間』京都大学学術出版会、2012 年に詳しい。
- (10) 20 世紀に入ると俳句も翻訳されるようになる。柴田依子『俳句のジャポニスム』角川学芸出版、2010 年を参照。
- (11) 前掲註 (7) クリス氏論文のほか、白井智子「『レオン・ド・ロニーの眼から見た日仏交流とフランスにおける日本語の始まり』」(『神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要』35、1996 年)、佐藤文樹「レオン・ド・ロニー—フランスにおける日本研究の先駆者」(『上智大学仏語・仏文学論集』7、1972 年) など。
- (12) 「万葉図書・情報室だより」40 号 (2015 年 12 月発行) を参照。奈良県立万葉文化館ホームページ (<http://www.manyo.jp/library/>) よりダウンロード可。
- (13) フランス国立図書館の『詩歌撰葉』は Gallica 電子図書館で公開されており (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k10545349>) これで確認した。こちらには五姓田義松による絵の描き入れがあり、当館所蔵『詩歌撰葉』の紙面のほうがよりオリジナルに近いと見受けられる。吉川順子氏 (京都工業繊維大学准教授) のご教示による。
- (14) 新村出氏は「巻末には原本が石版で美しく印刷して附綴してあります。(中略)「詩歌撰葉」といふ書は日本でつひ未だ見かけませんが、三十一葉あつて、色摺のかはり紙で美しい本のやうであります。何年の出版で何人の編纂か知りません」(前掲註 (6) 2 頁) と記し、これを日本で編まれた和歌抄出本ととらえた。しかし『詩歌撰葉』の選歌はロニーによるもので、タイトル「詩歌撰葉」(SI-KA-ZEN-YÔ) も彼の命名と考える。③序論には、日本の画家が装飾した色紙に詩歌のテキストを石板印刷したとあり、日本の書 (とくに草書体) に言及する部分もみられる。
- (15) ②前書き・③序論の日本語訳は、前掲註 (9) 吉川氏著書 241 頁およびフランス翻訳学会 (SoFT) 「学問的対話の方法としての翻訳学」第 1 回研究会「解釈と翻訳」(2016 年 3 月 19 日 (日)、会場：京都工芸繊維大学) 口頭発表の吉川順子「レオン・ド・ロニー『詩歌撰葉』Léon de Rosny, *Anthologie japonaise* —「序論」について」がある。④ a 万葉集解説の日本語訳は、時枝誠記訳「ローニーの詩歌撰集中の萬葉集解説」(『心の花』28 巻 10 号、1924 年) がある。
- (16) 高松政雄「ドイツに於ける日本学研究」(『日本文藝研究』47-4、1996 年)。
- (17) 佐佐木信綱「外人の萬葉集翻譯」(『和歌史の研究』初版、大日本学術協会、1915 年) 111・112 頁。
- (18) 佐佐木信綱『上代文學史』下巻 (東京堂、1936 年) 499 頁。
- (19) 佐佐木信綱『竹柏園蔵書志』(巖松堂書店、1939 年) 86・87 頁。

- (20) 2015 年 2 月 14 日（土）、共同研究員の加藤耕義氏に同行いただいた。ただし石川武美記念図書館は撮影・複写が不可のため、本共同研究会では天理大学附属天理図書館所蔵の『Gedichte aus der Sammlung der Zehntausend Blätter』（請求記号 911.22/タ 2）を複写入手し検討した。天理大学附属天理図書館では 2015 年 1 月 20 日（火）に原本調査を行い、そこで「村岡典嗣蔵書」の印を確認した。村岡典嗣氏（1884-1946）はかつて竹柏会に参加するなどして佐佐木氏と近い間柄にある。『萬葉集事典』所載の狩野亨吉蔵本とは別本であるが、佐佐木氏の周辺に万葉集翻訳書が集まっていた状況を物語っており興味深い。
- (21) 2015 年 1 月 22 日（木）に国際日本文化研究センター図書館において『Beiträge zur Kenntnis der ältesten japanischen Poesie』（資料 ID003676467）のマイクロフィッシュ閲覧および複写をおこなった。
- (22) 佐佐木信綱「外人の萬葉集翻譯」（『和歌史の研究』増訂再版、京文社、1927 年。のち佐佐木信綱歌学著作覆刻選第 3 巻『和歌史の研究』本の友社、1994 年に所収）120・121 頁。なお初版に掲載されていた『萬葉集歌鈔』の写真はない。
- (23) プイツマイヤー「譯萬葉集序」（『心の花』25 卷 11 号、1921 年）。序文の引用はすべてこれに拠る。
- (24) 新村出「海外の萬葉研究」（『萬葉集講座 第 2 卷 研究方法篇』春陽堂、1933 年）は「或は少し以前だが一八五七年乃至一八五九年即ち安政年間に派遣された塙艦ナヴァール號の舶載であるかも知れないが、日塙修交の開始は明治二年乃至四年の事であるから、むしろ明治初年の舶載とする方がよいかも知れない」（136 頁）と指摘する。
- (25) 『萬葉集歌鈔』の翻訳法については、本稿と同じく共同研究の成果として出された加藤耕義「万葉集の早期ドイツ語訳」（『万葉古代学研究年報』第 15 卷、2017 年）に詳しい。
- (26) 佐佐木信綱「英譯萬葉集に就いて」（佐佐木信綱全集第 8 卷『佐佐木信綱文集』竹柏会、1956 年）178 頁。なお同書巻末の佐佐木信綱年譜に、1939 年 8 月「軽井澤に獨譯萬葉集に就て、ツァヘルト氏、木村謹治博士、小城君と會す」とある。
- (27) 前掲註（24）137 頁。
- (28) 序文に「三十一卷から成るこの作品たるや」とあることについて、うち 1 巻を目録とするならば全 30 巻となり『万葉拾穂抄』の冊数と合致する。しかし「註解もなくして」の記述と整合しない。帝国図書館の蔵書が未整理であったための錯誤であろうか。
- (29) 序文によれば日本語の印刷はホフマンが監修した漢字の活字を利用したとのことである。
- (30) 前掲註（17）114 頁。前掲註（22）120 頁。